

令和元年6月21日現在

機関番号：32413

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K20771

研究課題名(和文)心房細動患者における抗凝固薬の内服継続に対する支援プログラムの開発

研究課題名(英文) Developing a support program for continuing to take anticoagulant drugs in patients with atrial fibrillation

研究代表者

渋谷 寛美 (Shibuya, Hiromi)

文京学院大学・保健医療技術学部・助教

研究者番号：20533334

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、心房細動患者の抱える重大な合併症である脳梗塞発症を防ぐために、必要とされている抗凝固薬の内服を継続するための支援を検討することである。

看護師が外来での関わりの中で、より効果的に関わるために服薬行動の継続が難しくなりそうな対象者をスクリーニングするためのシートの作成を行った。どのような要因が服薬行動不良につながるのかのリスク項目を抽出し、40項目からなるスクリーニングシート案を作成し、実際の対象者への調査を開始している。現在収集できたデータを解析しつつ、スクリーニングシートの項目の検討を行っている。今後項目の妥当性などの検証を行って行く予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で作成するスクリーニングシートを用いることによって、心房細動患者で抗凝固薬の服薬が必要となった対象者に対して、服薬開始の初期の段階で医療者の介入が必要となるリスクの高い対象者をスクリーニングでき、より対象者にあったケアを、早期の段階で効率的かつ重点的に提供するための一助となると考える。

このような早期段階での医療者による支援は、服薬行動が継続できないことによる心原性塞栓性梗塞の発症リスクを低下させるとともに、薬剤の飲み忘れを予防することに繋がる。その結果今後益々増大するといわれている医療コストを抑制させる可能性があると感じる。

研究成果の概要(英文)：In patients with atrial fibrillation (AF), anticoagulant is necessary to prevent cardiogenic embolism as one of serious complications. This research aimed to develop a support program for AF patients that continue to take anticoagulant drugs. Especially, because outpatient nurses efficiently interact with AF patients regarding drug-taking behavior, I first made a questionnaire sheet to identify AF patients with poor medication adherence. In particular, I first examined risk factors leading to poor drug-taking behavior, and then developed a preliminary screening sheet, which included 40 questionnaire items. Currently, this preliminary sheet is applied to AF patients who take anticoagulant drugs, and obtained data is analyzed. To develop a final screening sheet with less items, I plan to examine the validity of the 40 items in the preliminary sheet.

研究分野：基礎看護学

キーワード：心房細動 外来看護 服薬継続支援

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

不整脈の一種である心房細動を有する患者（心房細動患者）の国内数は、2020年には150万人に達すると予想されており、この疾患に伴う医療費や介護給付費の増大が懸念される。心房細動は、脳梗塞の中でも死亡率、要介護率、再発率がいずれも高い心原性脳塞栓症の最大の要因となっている。心房細動に伴う心原性脳塞栓症の予防として、抗凝固薬の内服（抗凝固療法）は極めて重要であり、この内服行動の継続（内服アドヒアランス）を援助する看護ケアの向上は急務といえる状況にある。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、心房細動患者の抗凝固療法の内服アドヒアランスおよびQOLを維持するための病態管理を含めた療養行動を向上するために、チーム医療の理念に基づいた支援プログラムを確立することである。

### 3. 研究の方法

本研究の目的を達成するために、以下3つの研究課題を設定した。1) 抗凝固療法が必要となった心房細動患者が抗凝固薬の内服行動に対してどのように認識しているか（重要性や効果など）を明らかにする。2) 心房細動患者の抗凝固薬の内服継続・内服管理に関して、外来看護師がどのような看護介入を今現在行っているのか、またどのような介入を今後行うべきと感じているか等、内服行動に対する看護師側の認識を明らかにする。1)と2)の結果を踏まえて、3) 心房細動患者の抗凝固薬の内服アドヒアランスやQOLを維持するための療養行動を効果的に高めるための外来看護における支援プログラムを確立する。本研究では、以下の手順で支援プログラムについて検討を行った。

#### 1) 先行研究の文献検討による服薬行動不良につながるリスク要因の抽出

先行研究の文献検討から服薬行動不良に繋がる具体的なリスク要因を抽出した。

#### 2) 医療者へのインタビュー調査からのリスク要因の抽出

1)で実施した文献検討から得られた既知の結果は、服薬行動に関する患者へのインタビュー、自由記述、質問紙調査から得られたリスク要因であった。その一方、患者自身も気付かない服薬行動不良になるリスク要因を、心房細動患者と日々接している医療者が認識している可能性も十分にある。それゆえ、1)で振り分けた服薬行動不良に繋がるリスク要因に加えて、臨床現場でどのような服薬行動不良のリスクが見受けられるかを把握するため、ヒアリングを兼ねたインタビュー調査を実施した（文京学院大学倫理承認番号 2014-0044, 未発表）。具体的には、循環器専門病院の外来に勤務し、心房細動患者の抗凝固薬の服薬指導に携わっている看護師4名、薬剤師4名に対して、心房細動患者の服薬行動不良に繋がるリスクをどのように捉え、どのように対応しているのかについて、一人につき1回30分程度インタビューを実施した。

#### 3) 複数の研究者のディスカッションを通じた質問項目の検討

アセスメントツールとなる質問紙を作成する最終段階として、まず始めに研究者が1)に記載した先行研究から抽出したリスク要因と、2)に記載したインタビューから抽出したリスク要因をアイデアの源泉とした質問文を作成した中から、53項目から成る質問紙の草案を作成した。次に、質問項目の妥当性を向上させるため、草案を尺度開発の経験者や循環器看護に精通している研究者と数回のブレインストーミングを実施し、質問項目の内容、質問項目間の関連性および質問項目の表現や日本語の適切さに関する検討を行い、質問紙の質問項目数を40項目に設定し、最終的な質問紙の項目を決定した。

### 4. 研究成果

#### 1) 先行研究の文献検討による服薬行動不良につながるリスク項目の抽出

先行研究の文献検討を行った結果、服薬行動不良に繋がる具体的なリスク要因として、属性要因、身体的要因、環境的要因、心理的要因、行動的要因の5つが抽出された。

#### 2) 医療者へのインタビュー調査からのリスク要因の抽出

リスク要因抽出にあたり、医療者から得られたインタビューデータを、1)で挙げた～を分析枠組に用いた。実際には、属性要因のうちの性格特性、環境的要因、心理的要因について具体的に語っている箇所の内容分析を行った。なお、身体的要因は患者の行動から観察できる内容ではないため、分析枠組みから除外した。分析の結果から、属性要因に6項目、環境的要因に2項目、心理的要因に9項目の質問紙項目が作成できた。

#### 3) 複数の研究者のディスカッションを通じた質問項目の検討

最終的な作成できた質問紙のリスク要因と質問紙項目は以下の通りであった。

属性要因：年齢、性別、既往歴、服薬に関する履歴、アレルギーの有無など8項目と性格特性に関する11項目とした。性格特性に関しては、2)で得られた内容について、患者を主語

にした表現や内容を反転し、読み替えた項目とした。例えば、「がんこな人」は「私はがんこである」と表現し、「整理整頓ができない人」は「整理整頓は得意である」と表現した。

身体的要因：自覚症状の有無と内服薬の種類に関する2項目とした

心理的要因：モチベーションと関連する項目として、1)と2)で挙げられた項目の中から、心房細動に対する認識(病気に関する情報収集、合併症への不安など)に関する4項目と抗凝固療法に対する認識(必要性、抵抗感など)に関する11項目とした。服薬行動不良には、心房細動や抗凝固薬に対する知識よりも、それらをどのように認識しているかの方が強く影響していると考え、心房細動や抗凝固薬に関する知識を問うような項目は除外した。

環境的要因：1)で挙げられていた施設までの距離は、通院手段に依存するため調査項目から外し、定期的な受診に対する負担についての項目および、患者を取り巻く他者である家族を含めた周囲からの声かけなどのサポートの有無についての項目を加えた。さらに、2)から医療者に対する信頼感(薬に関する質問のし易さ、十分な説明)に関する2項目を加えた。

#### 4) 質問項目の確認と今後の予定

3)で決定した質問項目の表現の分かりやすさについて、複数の研究者とブレインストーミングを実施した。その際、1項目内に2つ以上の表現が入らず、服薬行動や日常生活に即した表現となっていること、表現が患者に分かりやすいこと、などの最終確認を行った。さらに、患者の質問紙(40項目)への記入時間を予想するため、40~70代の健常者6名(男性3名、女性3名)に回答依頼をしたところ、平均時間は7.5分であり、実際の患者への負担は少ないと予測できる。

現在まで、120名程度の心房細動患者に今回の質問紙への回答を行ってもらい、データが収集出来ている。今後は収集データを解析し、質問項目数を40項目から服薬アドヒアランスと強い関連性がある10項目程度に厳選し、質問紙の妥当性の検証を実施する予定である。作成した質問紙は、服薬継続が不良となるリスクを抱えている対象者をスクリーニングするための目的でもあるため、服薬継続不良に繋がる対象者の予測性についても検証が必要であり、この点についても今後調査を継続していく予定である。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

H. Shibuya, C. Eto, M. Suzuki, R. Imai, A. Yamashita, R. Nakano, S. Kawanabe, M. Yokota, S. Shibuya: Exploring the possibility of virtual reality in nursing skills education: A preliminary study using a first-person video. Open Journal of Nursing 9, pp. 163-172, 2019, 査読有, DOI: 10.4236/ojn.2019.92015

増田元香, 渋谷寛美, 今井亮, 山下明美, 宮本さとみ, 横田素美: 本学看護学科のリメディアル教育に関する現状と今後の課題. 文京学院大学保健医療技術学部紀要, 11 巻, pp. 1-6, 2019, 査読有

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

### (2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。